

金沢大学サテライト・プラザ ミニ講演

日時 平成16年4月10日(土) 午後2時~3時30分

会場 金沢大学サテライト・プラザ講義室(金沢市西町教育研修館内)

演題 「ややこしや~ややこしや~ 一双子が出てくる文学の楽しさ」

講師 志村 恵 (金沢大学文学部助教授)

(志村) いきなりで申し訳ないのですが、短いビデオを見ます。

○ビデオ上映『ややこしや』(NHK テレビより)

後ろのお子さんたち、今の「にほんごであそぼ」、知っていました? 今ちょうどテレビでやっていますね。

さて、今日はいきなり変なものを首からぶら下げて出て来たわけですが、これは何でしょう? 双子が出てくる文学作品というのはけっこうあって、今まで1000点以上集めておりますが、これは本自体が双子になっている、五味太郎の『ふたごえほん みぎのほん ひだりのほん』です。

このように、双子がいろいろ出てくる話や絵本や小説がたくさんあるわけですが、そこへ行く前に少しだけ自己紹介をいたします。

## 自己紹介

僕は、自分自身が一卵性の双生児です。しかも、双子座です。これはただの偶然なんです(笑)。専門は19世紀のスイスのドイツ文学がいちばん得意なのですが、あとはキリスト教倫理学です。それから今交流史もやっています。ドイツと日本は、第一次世界大戦で戦争していたのです。そのときに、日本が中国のチンタオでドイツ軍のいろいろな書籍を持って帰っています。金沢大学にもあるのですが、そういう鹵獲文書のことや、当時チンタオで活躍していたベルリン宣教会のことなどもやっています。あと、文学のモチーフ、双子や温泉、ペスト、鏡というものがどういうふうに関係しているかというのを勉強して

います。双子の話をすれば少しは面白いかなと思って、今回ご用意いたしました。

## 双子のイメージ

せっかく来ていただいたので、僕も皆さんから情報が欲しいなということで、まず双子のイメージを書いていただけるでしょうか。

双子と聞いて何を想像しますか。思い浮かべることを自由に表紙のピンク色のいちばん下を書く欄があるので、もし書くものを用意されているかたがいらっしゃいましたら、ぜひ書いてみてください。何でもいいです。人でもいいし、イメージでもいいし。何かの事実や出来事ということでもいいですから、30秒ぐらい差し上げますので書いてみてください。難しく考えなくてください。画面にきんさんぎんさんが出ているぐらいですから、大げさに考えなくてけっこうです。待っている時間に「きんさんぎんさんうちわ」をお見せしましょう。今日はいろいろ双子グッズも持ってきました。

初めての知らない人をお願いしたほうがいいかな。何か書きましたか。

(フロア) 「うらやましい」と。

(志村) うらやましいですか。

(フロア) 小さいときに、ヒデオちゃんとヒデユキちゃんという双子の友だちがいて、その子はお母さんの手編みのセーターでいつも1本線と2本線というのがあったというのが。

(志村) なるほど。うらやましいというのは、少しうれしいですね。うらやましがられて。お願いできますか。

(フロア) マナカナちゃん。

(志村) マナカナさんですね。三倉茉奈、佳奈。朝の連続テレビ『ふたりっ子』に出ましたね。もう一人ぐらいいいですか。

(フロア) 今、こちらから「うらやましい」という発言があったんですが、前々から疑問だったんですが、どういうわけか双子は女性受けしますよね。モチーフとして、女の子にとって魅力的に見えるらしくて、少女漫画とかにもよく出てくるなと思って。今、イメージのところにも萩尾望都というのが混ざっていましたが。

(志村) ああ、なるほど。漫画にありますね。さて、女性に双子がモテる。経験がないので全然分からないのですが、実は不思議なもので、僕の弟はものすごくモテたんですね。バレンタインデーでは、机がいっぱいになる。僕は一個ももらえなかったということで、今でも2月14日は大嫌いです。

今、いろいろイメージを言っていました。うらやましいというのは最近の双子のイメージが反映されていますが、昔の日本ではむしろ嫌われるというか、忌み嫌われるというか、生まれてくると少し困ったという雰囲気がありました。さて、全員に聞くことはできませんが、例えば、僕が今けがをしたら、岐阜にいるわたしの双子の弟が痛がるとか、そういうテレパシー、同じ運命というのをお書きになった人、どなたかいらっしゃいませんか。せっかくですから、もう一つエピソードを紹介して、いよいよ本題に入りたいと思います。

これは、メジャーリーグのミネソタツインズというチームのヘッドキャップです。ミネソタはツインシティといって、街自体も双子みたいになっているのですが、チームの名前がツインズです。僕はこの帽子を手に入れるのに苦労しまして、アメリカに行っている友人に頼んで買ってもらったのです。もううれしくてしょうがない。ちょうどそのとき、弟が遊びに来るといふことで、駅まで迎えに行きました。そうすると、向こうからこういうやつ(写真を示す)が来るわけですね(笑)。全く同じ帽子をかぶってやって来たわけです。これ、テレパシーと思うのでしょうか。今日の話聞いて、そういうことも少し考えてみてください。

### 「双子」が出てくる神話や昔話

わたしたち文学研究をやっている人間には決まった手順がありまして、古いものをまず調べます。2ページに「双子が出てくる神話や昔話」という章があります。

わたしは少しだけキリスト教神学もやっていますので、聖書の話から入りたいと思います。子ども向けの絵本の表紙を出しておきましたが、これはヤコブとエサウという二人の兄弟、双子であります。聖書の「創世記」の25章を引用しておきました。

エサウのほうがお兄さんだったのですが、ヤコブに長子の権限をスープ1杯で売り渡してしまい、ヤコブは長子権を手に入れます。それから、念には念を入れて、目が見えなくなっていたお父さんをだまします。エサウは毛むくじゃらだったので、ヤコブは動物の羊の皮を着て、お父さんの手触りをごまかします。ユダヤ教の世界では父親が子どもに祝福を与えるわけですが、お父さんの祝福も奪い取ってしまった。双子でいながら、お兄さんのものを全部取ってしまい、そして家にいられなくなって、放浪に出て、そこで結局は12人の男の子の父親になります。それがユダヤの12部族のもとです。

これは非常に重要なことで、ユダヤ人にとって12部族というのは人間全体という意味合いがあります。つまり、このヤコブという双子は人間の祖先なのです。さらに念には念を入れて、このヤコブの長男ユダがまた双子の子どもを産むのです。このユダがユダヤ民族の語源です。ですから、聖書の間観によると、双子と双子に挟まれてユダヤ民族が成立しているというふうに考えられます。このように、世界の多くの民族には双子から世界が生まれたという考え方があります。これは後で日本の例も見ましょう。

さて、もう一つの「新約聖書」。キリストが登場する福音書には双子は明確には出てきませんが、特殊な伝承によれば、キリストの弟子のトマスという人物は、デドモ、つまり双子と呼ばれており、キリストの双子の兄弟だという説があります。ここにおいても、イエス・キリストという世界の救い主が双子だった。そのように世界の始まりや世界の救いの根源を双子が表すということがあります。

今日は、とりあえず双子のいい面、面白い面を主に見ていきます。

さて、今度は日本の神話です。イザナギとイザナミという双子神があります。その二人が交わって、次々と島を創成していったということで、そこに『日本書紀』の一部を書き写しておきました。僕は古典が全然だめですので、読まないでおきます。イザナギ、イザナミという神様が夫婦の契りをして、日本が出てきた、島が生まれたということになっています。いろいろ説があって、それは解釈の一つです。

それからもう一つ、ヤマトタケルノミコトがいます。これは、景行天皇のお子さんなのですが、一説によると双子であった。日本の各地を平定して行って、大和の国の勢力を拡大したのですが、ついには大和に帰ることができなかった悲劇の英雄として描かれてい

るそうです。

他の世界ではどうだったのでしょうか？ ローマ、これは皆さん、よくご存じだと思います。双子といえば、ヨーロッパ人はすぐローマの物語を思い出します。メスのオオカミの下に双子がお乳を飲んでいる像です。これはローマ市のシンボルです。ロムルスはローマ人という意味ですが、ロムルスとレムスという双子がいました。その双子によって、ローマができたということです。アルバという地域の王位をヌミトルとアムリウスの兄弟が争います。弟のアムリウスが王位を篡奪するわけです。ある王族を滅ぼすときには、一族郎党全部殺してしまうということはよくなされます。あるいは、分からなくしてしまう。そのときもヌミトルの娘イーリアにも結婚させないように、子孫が産まれないようにアムリウスがしていたのですが、どういうわけか妊娠してしまい、産んだ子どもが双子だったのです。これはいかんということで、テベレ川におぼれさせよとアムリウスは命令するのですが、始末を頼まれた漁師がかわいそうになって二人を川に流します。

川に流された偉人の伝承は世界中にあります。例えば、ユダヤ世界ではモーセです。「出エジプト」を主導した人ですが、彼も川に流されています。

さて、二人は岸にたどり着いて、オオカミのメスに育てられるのです。そのあと、羊飼いがそれを引き取り大きくします。成長したロムルスとレムスは協力して祖父の敵であるアムリウスを殺し、ヌミトルが王位に復活します。そのまま一緒にいればいいのですが、ここからが創世になるわけです。ロムルスとレムスは、自分が捨てられたテベレ川の河畔に、新しい世界、新しい都市を造ろうということで、ローマの都市建築に入ります。これで新しい世界、ローマが造られていくわけです。

ここからまた、双子の問題でややこしい主導権争い、兄弟争いが出てしまいます。どうやって街を造るかという都市の設計のやり方をめぐってけんかになり、ロムルスはレムスを殺してしまいます。

この双子の兄弟争いにおける殺害は、後からミステリーのところでも述べますが、けっこうあります。例えば、聖書の話のカインとアベルは人類初の殺人者となっていますが、カインとアベルも学者によれば双子だったという説があります。いずれにせよ、兄弟です。重要な文学のテーマに兄弟殺しがありますが、それが双子なのです。極端な兄弟争いのパターンです。これは文学史の中にたくさん出てきます。

さて、もう一つ有名なのは、当然、ギリシャです。先ほど、僕は自分が双子座の双子だと言って少しだけ受けましたが、その双子座です。ディオスクロイ、つまり神の息子、ゼ

ウスの息子という名前がついているカストルとポルックス、ジェミニです。ギリシャの神様は、とても人間味あふれる神々です。特に、ゼウスというのは女たらしです。きれいな女の人と見るや、すぐにナンパをしてしまうふとどき者です。しかも姿を変えることができます。白鳥か何かに化けてしまいます。すると女のほうは「かわいい白鳥さん」とかわいられます。実は白鳥はゼウスで、その隙にしっかりと関係を持ってしまうわけです。

伝承によっては、スパルタ王デュンドレオスの妻レダは白鳥に化けたゼウスにだまされ双子を産むのですが、同時に夫との間にも双子をもうけます。つまり、四つ子を産んでしまうのです。ツープアの四つ子です。カードゲームのポーカーの手のように。今、ツープアというポーカーの手について申し上げましたが、ポーカーにはフルハウスという手もあります。同じ数のカード2枚と3枚で、フルハウスです。ということでアメリカのテレビ番組「フルハウス」にも双子がちゃんと出てきます。そういうふうに乗っかってあるのです。ただの偶然か（笑）。

先ほどの話に戻りますが、レダはツープアを産みます。一組はヘレネとクリュタイムネストラ、これはギリシャ悲劇で大きな役割を果たす人たちです。それから、カストルとポルックスです。これが不思議なのですが、いろいろな伝承があり、人間の夫と神であるゼウスと両方の種ではらんでいますので、片一方は神的な性質を持ち、不死です。そしてもう一方には人間的性質があり、つまり死んでしまいます。こうして、カストルは不死、ポルックスのほうは死んでしまう設定になっています。

こういうペアだけでも対立する、神と人間、光と影といったものは双子にはつきものです。双子ですが、極端な性質を持ち合わせる。これは、本当によくあるパターンです。この双子は、今では船乗りの守護神にもなっているわけですが、いろいろな冒険をします。遠征に加わったり、勇壮なイノシシ狩りに加わる、いろいろな冒険をします。ところが、いとこのいいなずけを無理やり奪ってしまい、恨みを買います。そこで戦争のようになるわけですが、ポルックスはやりで突かれてしまいます。

ポルックスは死ぬ性質を持っていますから死んでしまいます。悲しんだカストルは、二人でいつも一緒にいられるようにゼウスに頼むわけです。今までは、片一方が人間で片一方が神的でしたが、ゼウスは交ぜて半分で割って、両方とも半神にして、死者の国の黄泉と、神々の住んでいる神殿・オリンポスに1日交代で生きるようにします。それは後のギリシャの作家によってどういうふうに変化がされたかということ、最後にはゼウスが二人とも天に上げて、いつも仲良くずっといられるようにした、そういう神話です。

これも一つの双子のパターンです。双子はいつも一緒。本当の双子はそうではありませんが、「いつも一緒」というのがよく出てくるモチーフになります。

僕の専門はドイツ文学ですから、グリム童話の話をしたと思います。『二人兄弟』というグリム童話があります。第7版でいうと60番です。資料の3ページのグリム童話のところに『二人兄弟』, KHM (キンダー・ウント・ハウスメルヘンの略語で、子どもと家庭のためのメルヘンという意味です) 第60番。これは、第7版による番号です。皆さんが今、前に見ているのは、スウェーデンの絵本から取った『二人兄弟』の表紙です。

グリム童話では、双子が出てくる話が四つあります。一つがこの『二人兄弟』, それから、『金の子どもたち』, あるいは『黄金の子どもたち』と呼ばれるもの。それから、『忠実なヨハネス』, そして有名な『ラプンツェル』です。『ラプンツェル』は最後に双子を産みます。これは幸せの象徴と解釈することができるかもしれません。今日はその中の『二人兄弟』を扱います。このメルヘンは『黄金の子どもたち』とも非常に密接な関係を持つものです。お話ししたいと思います。

この『二人兄弟』の話は、一説によると、世界じゅうに770もあるといわれています。僕もランケという人の『二人兄弟』の資料集を持っていますが、内容は全部、どこの国にどのような『二人兄弟』の話があるかを書いてあります。表だけでも3センチぐらいの厚さの本になっています。『二人兄弟』の類話はその位たくさんあって、やはり人間や世界の創世にかかわる古いメルヘンとわかります。本当に世界じゅうに分布しています。いちばん古いのは今から3000年以上前、紀元前1300年に、パピルスという紙のもとになったようなもので、植物の繊維を編んで作るものですが、それに書かれた『二人兄弟』のです。メルヘンを全部分類した有名なアールネ＝トムソンの中では、竜退治、ドラゴン退治という大分類の中に「ふたご、または血を分けた兄弟」という項目が立っています。このスウェーデンの絵本のページでは双子が喜んでいますが、祝宴の前に、竜ではなくトロルをやっつけています。北欧ですから、トロルという怪物が出てくるわけですね。もちろん竜が出てくる類話もたくさんあります。

『二人兄弟』の重要な要素として、双子はまず「特殊な出生」をします。双子は魚から生まれたりします。それから、「生命標識」。先ほどテレパシーの話をしました。ナイフを突き刺して右の面が曇ったらおれが危ない、左の面が曇ったらおまえが危ないというふうに、ナイフが曇ったらそのどちらかがピンチだという命の状況を表す「生命標識」が特徴です。そして、必ずどちらかが石になってしまいます。魔女にだまされて石になります。

そして必ず「金」が出てきます。『黄金の子どもたち』はもろにそうです。必ずどこかに金が出てきます。不思議なことです。「きんさんぎんさん」とは関係ないとは思いますが、金が出てくるのです。

こういう解説ばかりでは面白くないので、『二人兄弟』の物語をお話ししたいと思います。

「昔あるところに、仲の悪い兄弟がいました。弟のほうには、双子の息子がいました。ある日、息子たちは、兄、つまり伯父さんの家の台所で丸焼きにされている鳥の心臓と肝臓をつまみ食いしました。実は、それを食べると、毎日朝起きるたびにまくら元に金貨が出てくる不思議な鳥だったのです。兄の伯父さんはこれを知って怒り、『あれは悪魔の仕業だから、双子を家から追い出さなくては大変なことになる』と、弟を脅しました」。

これが不思議なのですが、弟はかわいい息子にもかかわらず、兄にそう言われてすぐ捨ててしまいます。

「双子の兄弟は森に捨てられてしまいました。ところが偶然、優しい狩人が出てきて、親代わりに育ててくれることになりました。やがて二人はりっぱに成長して一人前の狩人になる試験にも合格し、広い世の中に出ていきます。旅の途中、動物を撃とうとします。ところが、それぞれウサギ、キツネ、オオカミ、クマ、ライオンを撃とうとするのですが、泣いて助けてくれというので、全部助けます。そうすると、この動物たちは、お礼に子どもを一頭ずつくれました。

さて、いつまでも二人でいてはだめだと思い、二人は別々の道を行きます。そして、育ての親の狩人がプレゼントしてくれたナイフを、1本の木の幹に突き刺して歩いていきます。それは、双子の状況を知らせてくれる不思議なナイフです。曇ったらピンチだということを示してくれます。さて、弟はある国に着きます。王女が間もなく竜に犠牲としてささげられることや、もし竜を退治したら王女と結婚して国をもらえることを知ります。弟が、先ほどの動物の助けで竜をやっつけます。そして、竜の舌を抜いて、それを殺した証拠として王女がくれたハンカチに包みます。王女は、動物たちにお礼として首飾りを上げます。

ところが、頑張っただけで戦ったため、みんな疲れて寝てしまいます。そのとき様子をうかがっていた大臣がやってきて、弟の首をはねてしまいます。そして、王女を脅かし、自分が竜を殺して王女を助けたことにするよう命令します。そして城に戻り、王女と結婚することになりました。ところが、王女は何とかして逃れようと思い、結婚を1年後に延ばしてもらいます。1年の猶予が与えられたのです。目が覚めた動物は、主人が首をはねられて

いるのを見て怒ります。ところが、ウサギが何でも治す草の根を持ってきて首に塗ると、見事に首が元に戻ります。ところが弟は、そんなことになってしまい王女がいなくなっているのが悲しみ、また世界に出ていきます。そして、ちょうど1年後にその国に戻ってきます。

そして結婚式のことを知ると、動物をうまく使って結婚の席に着くことができます。そこに退治した竜が飾ってあるのですが、弟は、竜に舌がないことがおかしい、変だと言い、自分こそ本当に竜を殺したということで、王女のハンカチに包んだ舌を出して証明し、大臣は罰を受け、弟は王女と結婚します。

ところがある日、新婚の弟は、狐がやりたくて森に行きます。素晴らしい牝鹿を追っているうちに夜になってしまいます。火をたいて野宿の準備をしていると、魔女がやって来て、『わたしにも火に当たらせてください』と言います。魔女は動物が怖いというので、弟は動物を遠くにやり、魔女を火に当たらせてあげます。ところが、魔女は小枝で動物をたたき、小枝で弟をたたき、みんなは石になってしまいました。

さて、双子の兄が久しぶりに弟はどうしているかとナイフを見ると、片一方がさびていました。これは大変だということで、兄は弟の姿を求めて諸国を回り、弟の国に着きます。ところが、城の番兵が兄を弟と間違い、すぐに城に入れ、いろいろ混乱します。兄は、弟になりすましたほうがいいと判断し、王女と2～3日過ごします。しかも、同じベッドで休みます。ただし、これもヨーロッパ文学によくあるのですが、ベッドの間に剣を立てて、誠実を守り通します。これは、ドイツなどの中世の物語によく出てくるテーマです。さて、兄は弟のことを心配して森に行きます。すると兄にも、弟と全く同じことが生じます。しかし、兄は魔女の言うとおりにせず、逆に魔女を脅して弟を助け出します。こうして兄と弟は一緒に城に帰ります。

ここが生々しいのですが、弟は兄が自分になりすまして、こともあろうに自分の妻とベッドを一緒にしたことを聞いて怒ります。そして、助けてもらったのに、兄の首をはねてしまいます。ところが、首をはねた瞬間に、『ああ、とんでもないことをしてしまった』と嘆きます。すると、ウサギがまた例の何でも治す草の根を取ってきて、兄は生き返ります。弟は、ベッドに剣が立てられていることを聞いて、兄がどれほど誠実であったかを知った」。そういう話です。これが『二人兄弟』の話です。

## 「双子」が出てくる文学作品

## ア) 間違いの喜劇の系譜

詳しい解釈をやっていると時間がなくなることになるので、次に行きたいと思います。双子ものにおける入れ替わりや取り違えというのは、皆さん、即、想像がつくと思います。ということで間違いの喜劇の系譜です。先ほどの「ややこしや」というのは、このシェークスピアの『間違いの喜劇』を狂言に作り直した高橋先生の『間違いの狂言』の一部です。これは、ロンドンで公演したりして大変受けたそうです。

間違いの喜劇の系譜には本当にいろいろなものがあります。いちばんのもとになったのはローマのプラウトゥスの『メナエクス兄弟』という喜劇です。これをシェークスピアが上手に使って『間違いの喜劇』という喜劇にしたのです。本当に面白い劇です。どういふ話かという、離ればなれになった双子の主人と双子の召使がそれぞれペアでいます。アンティフォラス兄弟という主人のペアと、ドローミオという召使の双子がいるわけです。主人も双子、召使も双子、そっくりなペアが二組出てくるわけです。

彼らが家族で船で旅に出るとき、大きなあらしに遭いバラバラになってしまいます。兄ペアと弟ペアがバラバラになります。それから、父も母もそれぞれ別れることになります。それでどういうことになるかという、ひとかどのりっぱな商人になったペアのところに、もう一方のペアが偶然世界じゅうを探してやって来るというパターンです。召使もそっくりだし、主人もそっくりだしということでぐちゃぐちゃになってしまいます。そこでいろいろなことが起きて、最後は、「ああ、お兄さんだったんだ」「弟だったんだ」「ああ、わたしの妻だったんだ」というように、どたばたのあげく、父母も偶然再会し、みんなめでたく終わるといふのが『間違いの喜劇』です。

シェークスピアの喜劇は大体、一度アイデンティティを失いかけて新しい状況を生み出すわけですが、まさにそういったシェークスピアの喜劇の王道を行くのが、この『間違いの喜劇』です。

シェークスピアにはもう一つ、『十二夜』という素晴らしい喜劇、祝祭劇がありますが、それにも双子が出てきます。これも同じく一度アイデンティティを失いかけるようなシチュエーションがある作品です。まさに自分はだれなのか、わたしはわたしであってわたしでないような状況になるとき、双子というのがとても面白い機能をして、アイデンティティの確認、疑い、回復というテーマを見事に表現することができます。シェークスピアは本当に有名ですので、ぜひ読んでいただくと面白いと思います。

ネストロイはオーストリアの19世紀半ばに活躍した民衆喜劇、民衆劇の最大の俳優兼作家です。このネストロイに『染物屋と双子の兄弟』というのがあります。これは、兵隊に行った片割れを助けに行く染物屋の話ですが、あまりに似ているのでそちらと間違えられてばかりいて、一瞬、「おれはだれだろう」と分からなくなるのを笑うという、まさしくアイデンティティを疑う羽目になる双子の物語です。

## イ) 入れ替わり

今度は同じ間違いなのですが、入れ替わりものです。昔は一卵性のほうが多かったのですが、現在においては、統計上は二卵性のほうが多くなりました。でも普通は、双子といえば一卵性と思ってしまう人が多いです。一卵性は良く似ているので間違えられます。たとえば僕の弟は、さっき写真を見せましたが、ひげを生やしているにもかかわらず、それでも僕と間違えられることがあります。子どものときは面倒くさいので、そのまま通しました。これは一卵性の人みんなやります。とりあえず面倒くさいので。中には化けたままデートまでしてしまう不逞のやからもいるわけですが、そういうことはありえます。それは間違えるほうが悪いのです。それをわざと使う。すると入れ替わりのモチーフになります。

いちばん有名なのは、エーリヒ・ケストナーの『二重のロッセちゃん』。これは直訳で、普通は『二人のロッセ』と訳されています。

ミュンヘンにいるルーゼと、ウィーンにいるロッセ、この二人が偶然、夏のキャンプで再会してしまいます。どういうことかということ、お父さんとお母さんが離婚して、一人ずつ引き取ったのです。離婚して一人ずつ引き取って、後にまた再会するという双子はけっこう現実にもいます。それが物語の中で展開されます。二人は最初はすごく反発しあうのですが、やはり自分たちは同じところで生まれた双子だということが分かり、入れ替わろうということになります。お父さんと暮らしている方はお母さんをあまり知らない。お母さんと暮らしている方はお父さんをあまり知らない。それぞれを知りたいということで、入れ替わります。そして、入れ替わっておいて、やがて両親を説得する形でまた一緒に暮らすことになるという、そういうお話です。

このお話には大きな山場があります。ウィーンにいるお父さんのパルフィーは芸術家です。宮廷音楽監督ですから、女性とのつきあいもいろいろあるわけですが。ロッセとルー

ぜは、両親のよりを戻させようということで入れ替わっているわけですが、二人の望みとは違い、お父さんのパルフィーさんはイレネという女性と再婚しようとしています。ルイーゼになりすましていたロッテが、それに悩んでついに病気になってしまいます。自分でも、「自分が二人のうちどちらか分からなくなったわ」と叫ぶほどの精神的危機に陥ります。これをミュンヘンから駆けつけた母親とロッテになりすましていたルイーゼが助けます。つまり、母親とルイーゼと再会し、ロッテの熱は下がるのです。そして、二人の勇気と愛情に負けて、両親は話し合ってもう一度やり直すことになるという話です。

これはヨーロッパ、特にドイツの人たちがみんな知っている話です。ちなみに、エーリヒ・ケストナーの『飛ぶ教室』の映画が金沢でも間もなく上映されるようなので、関心がある人は行ってみてください。とてもヒューマニティにあふれる作品です。あんな学校があったらいいなと思う話です。

いい話ばかりではなく、少しつらい話も「入れ替わり」にはあります。これは残念ながら翻訳がなく、皆さんが直接手に取ることができませんけれども、1874年から1969年に活躍したヴィルヘルム・フォン・ショルツという作家がいます。この人は、ナチスに少し荷担したせいもあり現在ではほとんど忘れられた存在です。彼の代表作に『ペルペトゥアーブライテンシュニット姉妹の物語』という題の小説があります。本当に分厚い小説ですが、1510年代あたりの宗教改革期を舞台にした魔女裁判ものです。魔女裁判というのが、16世紀、17世紀ヨーロッパを席卷し、多くの女性たちが火あぶりになりました。それを題材にしたものです。そこには、カタリーナとマリアという双子姉妹が出てきます。このそっくりな双子は、両親さえ二人一緒にいなくては判断がつかないほど似た双子という想定になっています。

現実ではほとんどありえません。僕たちは双子の中でも相当似ている部類ですが、親は絶対に間違いません。一般には育児にちゃんと参加していない父は間違えるようですが、僕の父親は一度も間違えたことがありません。でも声は間違えます。実は電話で母親が1回だけ間違いました。だいぶショックだったようです。配偶者はよく間違えます。正面から見ると大丈夫なのですが、後ろからだったりすると仕草もそっくりなので間違えたりするのです。僕の弟の連れ合いが間違え、一週間ほど落ち込んだことがありました。それと一卵性の場合にはおいも似ています。弟が飼っていた老犬が間違えたことがありました。

さて、作品に戻ります。二人の間に恋の争いがあるって、結局、カタリーナがマリアの恋人を奪う形になります。一方のマリアは悲嘆して修道院に入ります。これはよくあるパタ

ーンです。恋に破れて修道院に行く、これはヨーロッパ文学の一つの典型です。日本ならば尼寺に入るといふ感じでしょうか。有名な『ハムレット』の中にも、「尼寺に行け」というせりふがあります。ということでマリアは修道女になります。

ところが、カタリーナには不思議な力がありました。フワッと幻想が見えるのです。その幻想によって未来が分かるのです。これも、双子ものの中に時々出てきます。不思議な力を持った双子。僕たちには全然ありません。テレパシーも不思議な力も何もありません。でも、文学の世界には不思議な力を持った双子がたくさん出てきます。カタリーナもそれです。ある日、「ペストがやってくる、アウグスブルクの街を閉めろ」と予言します。そしてペストをやり過ぎます。さらに、何かものが落ちてくるのが見える。だから「危ない」と警告して命を助けます。ところが、そういう不思議な力はこの時代では魔女じゃないかと疑われます。

異端審問官は、彼女の力が神から与えられたものであることが分かっていますが、人々の魔女の疑いに抗しきれず、死刑判決を下します。処刑の直前、修道女になったマリアが最後の面会にやってきます。そして、面会の途中入れ替わってしまいます。つまり、カタリーナが気を失ったそのすきに、マリアは自分が死刑囚の服を着て、カタリーナには尼僧服を着せます。こうしてマリアは犠牲になるのです。マリアという名前はそれを象徴しています。

その後、カタリーナはペルペトゥアというマリアが使っていた修道女の名前を語って自分が修道女になります。そして、奇跡の力を持っていますから、例えば、神聖ローマ皇帝妃の命を救うなど、いろいろな奇跡を行って聖人になります。この小説のミソは、片一方は魔女として火あぶりになり、片一方は聖人としてあがめられる、そういう運命の不思議を扱っているのですが、ふたを開けてみると、魔女と聖人は同じ人物だったというところにあります。

この小説は、魔女と聖女という極端なものを扱っているのですが、双子ものの重要な特徴をもう一つ持っています。つまり、極端な性質の双子は、実は一人の人物の二つの側面を分離して、それぞれが表現しているということです。双子の本心としては異議を唱えたいところです。双子というのはたとえどんなに似ていたとしても、それぞれ別の人格、別の性格を持っていますから、二人合わせて一人の人格というのは困るのです。しかし、文学の常套としてはすごく悪いやつとすごくいいやつがいて、それを双子のそれぞれが表すのです。

アーノルド・シュワルツネガーの『ツインズ』という映画をご存知ですか。あれはひどい話です。遺伝子の実験をして、いい遺伝子は全部シュワルツネガーに行ってしまう、カスだけ集めて小さい方ができるという、ありえない話です。絶対ありえない話ですが、そういう形で描かれることがあるのです。いい部分はこちら、悪い部分はこちらという、そういう極端な描き方、両極端で表すということです。それにも少し関係するような『ペルペトゥア』でした。

## ウ) ミステリーと双子

次はミステリーです。双子はけっこうミステリーに出てきます。先ほど、マナカナという話が出てきましたが、マナカナが出た双子のものでNHKテレビの『双子の探偵』があります。あれはもともと少年少女ものを書いているはやみねかおるの三つ子ものだったので、すが。

イギリスの聖公会という教会の一派があるのですが、その聖職者であったノックスという人が「探偵小説十戒」というのを作っています。これは笑えるのでいくつか紹介しましょう。一つに、「犯人は、物語の初めから登場している人物でなければならない」。当たり前の話です。ミステリーで突然犯人は全然関係のない、今まで出てきていないやつだという、こんなふざけた話はありません。それは反則です。次はもっと笑います。「中国人を主要な人物にしてはいけない」。これはよく分かりません。じゃあ中国の探偵小説はどうすればいいのかと思います。その十戒の中に、「双生児その他、うり二つといえるほど極似した人間を登場させるのは、その存在が読者に予知可能の場合を除いて、避けるべきである」というのもあります。何か悪いことをした人がいるけれども、アリバイがあった。実は、それは双子でした、チャンチャン。全然面白くない。ということで、それはだめだと禁止されたわけです。しかし、存在が読者に予知可能の場合はオーケーなわけですから双子はよく出てきます。有名なのが、江戸川乱歩の『双生児』です。これは少し気持ち悪いのですが、映画のポスターです。後ろの文献表に出しておきましたが、江戸川乱歩にあと『三角館の恐怖』など幾つか双子ものがあります。

そしてもう一つ有名なのが、エラリー・クイーンの『シャム双生児の謎』です。シャム双生児というのは、今では連結型の双生児などと言います。シャムはタイでしょうか。有名なシャム出身の連結型の双生児チャンとエンというのがいて、アメリカの見せ物小屋に

出ていました。そこからついた名前です。『シヤム双生児の謎』では結合型の双生児の少年は実は犯人ではないのですが、ある事件の犯人に疑われる、そういう作品です。これは非常に難しい問題を扱っています。

皆さんは、ベトナムの枯れ葉剤の影響で生まれたといわれているドク君ベト君をご存知でしょうか？ 金沢大学の附属学校のかたが一生懸命支援をされていて、二人が通った病院や学校と金沢大学の養護学校が姉妹校提携しています。この二人の場合も、切り離すとき非常に大変だったわけです。大抵は死んでしまうケースが多いです。では、連結型双生児の人格はどうなのでしょう？ 実は、ドク君たちはパスポートが二人で1個でした。僕はそれを聞いて激怒しました。二人なのにパスポートが1個とはひどい話です。そういうことが、裁判の場合起きるのです。アメリカと日本は先進国で死刑を残しているめずらしい国ですが、例えば、連結型の片一方が死刑判決を受けた場合どうするのでしょうか。一方が処刑されれば、もう一方も死んでしまいます。何もしていないほうが死ぬのは問題です。その問題を取り扱ったのが、エラリー・クイーン『シヤム双生児の謎』です。

これはもともとマーク・トゥエンの『かの異形なる双生児』で展開された問題でした。マーク・トゥエンは『ハックルベリー・フィンの冒険』や『トム・ソーヤの冒険』の作家ですが、実はいろいろ面白いグロテスクな作品もいっぱい書いています。とても皮肉屋です。彼はドイツでひどい目に遭ってドイツ語を憎んでいることでも有名でした。とても面白い作品を書いているのでほかのも読んでいただきたいのですが、シヤム双生児の死刑の問題を扱っています。

あと、僕が発見したというか、かつてに主張しているのが、双子の探偵が出てくると、シリーズ化するということです。たとえば横溝正史の『双生児は踊る』と『双生児は囁く』というのがありますが、この中に、夏彦・冬彦というタップダンサーの探偵が出てきます。このキャラは、最終的には金田一に吸収されてしまい、金田一シリーズになってしまいます。

それから赤川次郎も双子が好きで、探偵だけではなくて違うモチーフでも使っています。その赤川に『ウェディングドレスはお待ちかね』というシリーズがあります。南条家のお嬢様の片割れが家出をして、暗黒街の女ボスという、これは極端な双子が出てくるものです。お嬢さんと女ボスという、極端な性格を持った双子姉妹が入れ替わり作戦によって事件を解決していくという、面白いけれども、何かだまされたような気分になる不思議なシリーズです。

そして、先ほどの夏彦・冬彦をパロディにした夏美・冬子が出てくる、志茂田景樹の『双子姉妹の事件簿』です。これはホモセクシャルというか、双子姉妹が関係しそうになるようなくすぐりもある、少しエッチなシリーズです。これも同じように入れ替わり作戦で犯人たちをやっつけます。

入れ替わり作戦でいちばん面白いのは、宗田理の『ゴットマザーと子ども軍団』、あるいは『ゴットマザーと双子チーム』のシリーズです。これは、相当子ども向きですが、大人が読んでも笑える、あるいは自分の人生を少し考えさせるような作品です。

## エ) 最近の遺伝もの

まとめに入っていこうと思います。双子を介して別の大きな問題が扱われます。それは、環境か遺伝かということです。ご存じのように、人間の性質は遺伝によって影響を強く受けるものと、環境のほうが強いものがあります。それを調べるとき、双子が利用されます。これを「双生児法」といいます。一卵性の双生児は同じ遺伝子です。しかし環境は違ってきます。人生が変わっていきますから。一卵性の双生児で、もし違いが出れば環境の影響だと考えられます。それから、二卵性の双生児の遺伝は、二卵性ですから普通の兄弟と同じです。一緒に生まれたか、時間を隔てたかの違いだけです。ですから、もし違いが生じたとしたら、それは環境と遺伝の影響と考えられます。ある性質・特性が一卵性でも二卵性でも同じ程度で似ているとすれば、それは環境のせいだといえます。逆に、ある特性が、一卵性の場合よく似ているけれども二卵性の場合はあまり似ていないとなると、遺伝の影響になります。このようにして、人間のいろいろな能力や性質を調べていくのが双生児法です。

東京大学の附属中高等学校に、双生児クラスがあります。世界でも珍しいケースです。そこでそういう研究も一生懸命やっています。例えば、体育の跳躍は遺伝の影響のほうが強いというようなことです。皆さん信じないかもしれませんが、実は算数は環境の影響のほうが強いようです。1名を除いて世界中の学者が算数は環境だという結果を出しています。そういうことで遺伝の問題は双子ものには必ずと言ったいいほど出てきます。

これは、僕の先輩が訳した『ブルー・プリント』という作品です。これはクローンを扱った作品です。ある女性が自分の余命が長くないことを知って、クローニング技術で自分のクローンを自分で産みます。自分と同じ遺伝子を持っていますから、二人はいわば自分

A, 自分Bになります。自分で産んだのですから自分は母で、自分Bは子どもです。しかし、同じ遺伝子だということを考えると、二人は双子と考えられるので、姉妹でもあるのです。そういう問題を扱った作品です。

スーレイというのが、そのクローンで生まれた子どもの名前です。イーリスがお母さんの名前です。(実はスーレイはイーリスを逆から読んだ綴りです。) お母さんのイーリスの死まで、二人はわたし=あなたの問題に苦しみます。お母さんのイーリスが亡くなったあと、子どものスーレイはこういうふうにも考えます。「双子は片割れの死を、クローンの子はクローンの母の死を、どうやって受け止めたらいいい？ これからどうなるの？ わたしも病気になるの？ みんな遺伝で決まってるの？ わたしはただの 21 歳ではなくて、50 歳でもあって、お母さんと同じ年なの？」と自分に問いかけていきます。そして、その問いを積み重ね、時間の経過とともに、やっと一人で生きてもいいという喜びから泣くことができるようになります。そして、死んだのはあなた、お母さんであって、同じ遺伝子を持っているけれど、わたしではない。クローンであるけれども死んだのはお母さんでわたしではないという結論にたどり着きます。そして、スーレイは、それを「わたし歴 0 年」と名づけます。

作者のケルナーは、物語の最後に、スーレイがダブル・ユーというペンネームで美術家として独り立ちしていく 10 年後も付け足して物語を終わっています。ダブル・ユー、二人のあなた、二重のあなたというペンネームをつける、そこまで余裕を持って生きていけるようになるというものです。

遺伝子ものには気持ちが悪いものもけっこうあります。読むのがつらいものもあります。よく引用されるアイラ・レヴィンの『ブラジルから来た少年』を説明したいと思います。クローンが話題になると、必ずこの『ブラジルから来た少年』が引き合いに出されるからです。つまり、ヒトに対するクローン技術の是非を問うとき、ヒトラーのクローンが出てきたらどうするのかという批判が必ず出てきます。ヒトラーのクローンが出てきても、本当は全然大丈夫です。環境がヒトラーとは全然違いますから。遺伝が同じでも、どういう性質が発現していくのかは、環境によって異なってくるのです。ですから、ヒトラーだろうが何だろうが、全然関係ないのですが、必ずそれが引き合いに出されます。この小説が恐ろしいのは、ヒトラーの遺伝子をばらまいた子どもたちのお父さんをヒトラーがお父さんを亡くした年に殺して、ヒトラーと同じ家庭環境をむりやり作り上げ、その子たちをひねくれ者にして、ヒトラーと同じ人格を作るという恐ろしい陰謀が出てくるからです。

それから、ケン・フォレットも大変人気があるサスペンス作家ですが、『第三双生児』という作品があります。これは優性思想に基づいて、優秀なアメリカ兵を作るために、攻撃的な性質と強靱な肉体を持ったクローンをたくさん作っていこうという政治陰謀を扱った小説です。そのクローンの一人が、偶然優しい人間に育ちます。そして、彼が事件＝自分のクローン問題を解決していくという話です。

次に東野啓吾の『宿命』を挙げておきましたが、あともう一つ『分身』という作品もあります。『分身』のほうがクローン技術と関係しています。遺伝子ホラーというものが最近ブームですが、東野啓吾の『宿命』と『分身』もそこに分類される作品です。また、吉村達也の『ふたご』もそうです。傾向としては、遺伝決定論的な感覚が強くあります。先ほども言いましたように、遺伝と環境は両方が支配しているのですが、最近では、全部遺伝で決まる遺伝宿命論的考えが散見されるので、ちょっと心配です。それから、ドーキンズではありませんが、遺伝子は利己的だという考えもよく見ます。たとえば吉村達也の『ふたご』などの遺伝子ホラーの世界では、遺伝子が意思を持っているのです。遺伝子の自分の意思によって、人間を変えていくという、遺伝子自身が明確な意思を持っている、そういう遺伝子ものがあり、そこで双子が扱われることがあるのです。確かに面白いのですが、双子本人としては少し後味が悪いというか、嫌な感じがするものです。

## オ) 名作の数々

時間がないので、有名な作品の名前と内容を紹介して終わりたいと思います。川端康成の『古都』は映画にもなっていますからご存じの方が多いと思います。別々に育てられた双子、この場合は捨て子です。捨て子になり、京都の商家に拾われた千重子は一人娘のお嬢さんとして育てられます。その千重子が村の娘の苗子に会います。これが片割れです。二人は、やはり環境が違う、いろいろ事情があるということで、一緒に住むことはしませんが、「また遊びに来てね」というような千重子の思いで小説は終わっています。別々に育てられた双子という、双子ものの一分野に入ります。

この分野の好例としては、ヒギンズの『双生の荒鷲』。この作品では、別々に育てられた双子がドイツ軍と連合軍それぞれの空軍パイロットになり、双子同士で空中戦をするという、運命の不思議を扱った作品です。それから、ジェフリー・アーチャーの『運命の息子』。この作品は、アメリカの大統領選を描いています。わざと取り違えられて育てられた双子

が共和党と民主党に分かれて大統領選を戦うという不思議な運命の偶然ものです。そういう、離ればなれになる双子の話は現実にもけっこうあり、ノンフィクションも出ています。

そして、忘れていけないのが栗本薫の『グイン・サーガ』。現在、93巻までできました。100巻を目指す大河の流れです。『グイン・サーガ』に王家の男女の双子が出てきます。それぞれがどうなっていくのか。僕は、最後には、その双子に象徴されるそれぞれの世界が主人公グインによって統合されるだろうと踏んでいますが、予断を許さないところです。全100巻を目指していますが、多分100巻を軽く超えるでしょう。初期の『望郷の聖双生児』のカバーを出しておきました。

それから、双子は一緒におなかにいるわけですから、厳密にいうとどちらが先に生を授かったかだれも分かりません。一卵性ならば分割してできますから同時です。受精も同時、分割も同時です。でも、産まれるのはどちらかが先です。昔、日本は、先に生まれたほうを弟・妹にし、後から生まれたほうを兄・姉にしましたが、戦後は生まれたとおりにするようになってきています。そこで出てくるのは、どっちが王権を継ぐか、どっちが家督権を継ぐかというお家騒動の問題です。有名なのは、アレクサンドル・デュマの『仮面の男』、あるいは『鉄仮面』です。ルイ14世とその双子の兄弟の世継ぎ問題を扱った小説です。この世継ぎ問題というのは、日本においては、例えば三笠宮が双子だったという説があったりで、どこの国でもやはりあるようです。

家督権を争って血みどろの戦いになるのが、ドイツ18世紀末のシュトルム・ウント・ドラック期に活躍したクリンガーの『双子』です。これはどっちが家督権を継ぐか兄弟争いになり、片一方を殺してしまうという悲劇です。世継ぎ問題に関しては、例えば片一方を捨て子にしてしまっただけで分からなくするというパターンがあります。それから、殺そうとするけれども、生き延びるといったパターンがあります。柴田錬三郎の『運命峠』もそうです。高橋英樹の『桃太郎侍』もそうした双子の一人です。桃太郎侍は、将軍家光だったかの双子の片割れなのです。それで天下御免なわけです（笑）。「桃太郎侍」は、結局、家督争いを防ぐために出されたかわいそうな双子なのです。

次に、ジョルジュ・サンドの『愛の妖精』です。今までのものは、双子を使っていろいろなものの考え方や思想、命の問題などを突きつけていたわけですが、『愛の妖精』は双子自身の悩みを描くものです。双子自身が、「わたしはだれだろう」と悩む姿を書くことによって、わたしたちの人生の問題や思春期でいうと自我の確立を手助けする、そんな仕掛けになっている作品です。これは、男男の双子の話です。両親は自立させなくてははいけない

ということで双子の片一方を奉公に出します。そうやって自立心がだんだん芽生えていく。そして恋愛を通して、それぞれが本当に自我を確立していきます。ところが、同じ娘に恋をしてしまい、片一方は兵隊に出て行くことで身を引くという物語です。僕は、ジョルジュ・サンドが双子とどう関係していたかは分かりません。しかし、この作品を読んで本当に驚きました。わたしたち双子の気持ちが非常によく出ているからです。

それと同じくらい双子の気持ちがよく表現されているのが、堀田あけみの『ボクの憂鬱 彼女の思惑』という作品です。これは双子姉妹の思春期の問題を扱った作品です。どのようにして自分を表現していくのか、これからどう生きていくのか、双子の相手とどうかかわっていくのかを、恋や青春のいろいろな局面を描くことで示しています。堀田あけみは、教育心理学の勉強もして、今、大学でも教えています。そういうことがあって双子の心理がよく分かっているのかなあと思います。

梅崎春生の『狂い嵐』は、日本の双子が出てきた作品の中で、僕のナンバーワン、遠慮して言っても5本の指に入る作品です。これは本当にいい作品です。双子の片一方が徴兵されます。赤紙が来て兵隊に取られる。そのときのシーンを中心に構成された小説です。少年期のときの競争心といったものを織り交ぜながら双子の気持ちを描いています。僕が初めてドイツに行ったのは1978年です。大学を半年休学し、リュックを背負ってドイツに行ったわけです。当時はまだ羽田空港でした。弟が東京の大学にいたので送ってくれました。弟は僕を2晩泊めてくれたのですが、運の悪いことに、少し前にこの小説を読んでいたので。彼はこれが今生の別れじゃないか、これでもうこいつには会えないのではないかと思ひ半分涙目になっていたわけです。こちらは何が何だか全然分かりませんでした。後から読んでみて、当時の弟の気持ちがよくわかった次第です。双子の別れを本当にしみじみと描いた作品です。最近では梅崎春生が読まれることはあまりないかもしれませんが、椎名麟三や梅崎春生にはやはりいい作品が多いです。一応顔写真を掲げておきました。僕は日本文学における双子ものナンバーワンと思っています。

最近の、本当に最近のものを三つ紹介します。まず、いしいしんじの『プラネタリウムのふたご』です。気をつけないと落涙してしまう作品です。これは大人も中高生も泣けます。プラネタリウムをやっている男のところへ双子の子どもがもらわれます。これも捨て子です。やがて大きくなり、それぞれが別々の道を歩んでいきます。一人は、プラネタリウムの投影技師になり、もう一人はサーカスの芸人になります。最後にあつという場面があるので、説明はここまでにします。本当にほのぼのとした優しい文遣いの中に、人間の

優しさと思いがやりが描かれています。こういう時代だからこそ読みたい作品です。

二つ目は、時代状況に直結した作品です。山田詠美の『Pay Day!!』です。これは 9.11 で母親を亡くした男女の双子の物語です。9.11 事件と双子の心の成長を絡ませた、日本人が書いたとは思えないアメリカ小説の雰囲気をもった作品です。構成も巧みで、非常に躍動感のある、ポップなと言い過ぎかもしれませんが、とても素敵な作品です。

三つ目は、今、飛ぶ鳥を落とす勢いの横山秀夫の『影踏み』です。これは、同じ主人公が出てくる短編集です。父親と一緒に兄弟を亡くしています。火事で片割れを亡くした双子が主人公です。亡くしたその一人が、声として耳に現れます。もう一人の人格として亡くなった片割れが現れてくるのです。実はこのパターンは、双子ものによくあります。二重人格になってしまうもの、あるいは亡くなった人がこういう声や、あるいは幽霊というものもありますが、そういう別の姿で現れます。二重人格というのは、その双子の片一方を亡くしたショックで自分の中に相手と自分が共生してしまい、二重人格となって自分と相手が代わりばんこに出現するというパターンです。ウズの『パリンドローム』、小池真理子の『ナルキッソスの鏡』、それから少年少女もので、高科正信の『ふたご前線』が二重人格を扱った作品です。

こうした問題は、実際の双子にとっても非常に大切です。ある研究によれば、双子が片一方を亡くす精神的ストレスは、実の母親を亡くすよりも大きいといわれています。非常に癒着した関係の双子の場合は、このように二重人格になるほどのショックを受けると思っています。僕のようにもういい年をしたおじさんになってくると、この先どうやって二人は別れていくんだろうということも考えていかなければならないのです。そういう意味も含めてこれらの作品を紹介しました。

片一方の死を扱った少年少女ものには、フェートの『さて、ぼくは』やボーゲルの『ふたりのひみつ』などがあります。子どもの時代に双子の片割れを亡くす物語を通して、読者に死の問題を考えさせる作品です。

あとは雑多なイメージリーになってしまいますが、例えば、先ほどからテレパシーの話がありました。テレパシーものはもちろんあります。また、片一方が死んだら相手も一緒に死んでしまうという究極のシンクロものもあります。それから、二人で1セットというパターン。漫画ですが、『少年アシベ』の中に、「じっちゃん」というのが出てきます。「じっちゃん」が経営している会社に双子の社員がいるのですが、二人で1セットだからということで、一人分の給料しかもらえないのです。

それから、二人で一つのパターンの別型として、完全に同じおしゃべりをする双子。映画の『モスラ』にザ・ピーナッツ扮する完全にシンクロしながら話をする精が出てきました。また、シンクロではなくて、片一方だけだったら何を言っているか分からない。二人そろろうと、子音と母音が上手に補いあって一つの声になるという、そういう双子が出てくる作品もあります。有名な話ですが、ある種の双子にはその双子にしか使わない、その二人にしかない秘密の言葉があります。僕たちはそういう双子ではないのですが、中には二人にしか分からない語彙や二人にしか分からない言い回しをする双子もいるのです。

その他にも、特殊な能力を持った双子、英雄の援助者としての双子などまだまだいろいろな双子があります。でも、そろそろ時間ですね。

### お勧めの「双子」が出てくる文学作品リスト

もし興味があると思ってくださったら、一応ホームページ (<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~germ/member/lehrer/megumi/booklist.html>) に、双子が出てくる本のリスト、本だけではなく映画や漫画も若干入っています。800件から1000件近くあると思います。それと双子が出てくる本、あるいは作品についての論文というか、よもやま話を三つ載せておきました。「子どもの本における双子」（子どもの本において双子はどう出てくるのかという話）、「文学における双子 —最近のバイオもの」（先ほどの遺伝子の話などが出ています）それから、「文学における双子：その広大なイメージラリー」（どういうものが双子の作品であるのかという文学における双子の分類）です。興味のある方は見てください。

最後に、絵本に素敵なものがいっぱいあるということを指摘して終わりたいと思います。例えば、芭蕉みどりの双子のこねずみ『ティモシーとサラ』シリーズ、それから、『リトル・ツインズ』シリーズ。そして、宮沢賢治にも『双子の星』という作品があります。また、双子の田島征三、田島征彦兄弟の絵本『ふたりはふたご』。そして中川李枝子の『ぐりとぐら』シリーズなど。みなさんが知っている絵本があると思います。もし、この双子の本に出ていない本、あるいは絵本を皆さんが見つけたら、ご一報ください。日本じゅうの人から情報を集めていますので。

ということで本当に終わりにしたいと思います。ありがとうございました（拍手）。

## 質疑応答

(質問者1) 大体出てくるのは、男男、女女ですか。

(志村) ありがとうございます。それは大変面白い質問です。例えば子ども向けでいうと、昔は男男、女女が多かったのですが、最近、男女ものも増えてきています。それから同性ものでもう一つ言えることは、女女の双子ものが増えてきているということです。先ほど、女性は双子が好きとの意見がありましたが、どういうわけか、子どもの本に限っていえば、女性の双子ものにいい作品が多いです。しかも、元気な作品が多い。何か、時代の流れと並行している、女の人のほうが元気なのかなと思わせる要素は、子ども向けの本にもあります。では、文学史全体でどうでしょう？ やはり男男、女女の同性ものが多いです。男女を扱ったものに関しては、今日はあまり言及しませんが、近親相姦ものもあります。例えば、ニーベルンゲンのワルキューレ神話から題材を取ったトーマス・マンの『ベルズィンゲンの血』。神話ですが、イザナギとイザナミもそうです。男女の近親相姦ものは昔けっこうありましたが、それ以外はあまり男女の双子ものはなかったようです。つまり、同性ものより象徴性が少ないということでしょう。双生児研究学会という学会があるのですが、二卵性双生児のほうが多くなったということあって、遅れている男女の双子の研究を進めなくてはといわれています。現在では二卵性が増えて、男女の双子という意識が強まり、作品にも男女の双子が出てくるようになってきているのではないのでしょうか。

(質問者2) 双子の出生率はどれぐらいでしょうか、また双子の作家としての作品を教えてください。

(志村) まず、最初の質問、出生率ですが、長い間、不妊治療などの影響がないところでは、大体1000回出産があったら6、7回といわれていました。最近、それが上がってきて、石川県は全国でも双子以上の多胎児の出生率が高いほうです。特定の病院が頑張っているということですが、1000分の10から11です。そうすると人口の2%くらいに当たります。面白いことに不妊治療で双子が増えているのですが、一卵性の出生率は1000分の4あたりで、これは世界じゅう同じです。つまり、偶然から生まれるので、確率も同じわけです。二卵性はホルモンの影響などいろいろあり、アフリカのあるところでは10%近いと

いう地域もあるぐらいです。

それから、作家の話ですが、自分が双子である作家は、アメリカのジョン・バース、ドイツのイルゼ・アイヒンガーがそうです。芸術家でいうと、写真家の土田ヒロミや、「クロコダイル」というアニメーションを作ったブラザーズ・クエイなど何人かはいます。

(質問者2) 双子ではないかたが双子を題材にしてこのようなたくさん作品を書いているのはどうしてでしょうか。

(志村) やっぱアイデンティティの問題を扱いやすいということでしょう。それから偶然や運命の問題が扱いやすい。また、遺伝と環境、命や死と関係していきます。神話の世界でいうと、不思議な異能を持つ存在、珍しい存在ということで特殊性があったわけですが、時代が近代的になっていくと、自我の問題意識などが出てきます。本当に著名作家が双子を扱っています。子どもものに関連して強調したいのは、本当にいい作家の双子ものは本当にいいです。当たり前なのですが、本当にそう思います。いぬいとみこや松岡享子、中川李枝子、今江禎智、灰谷健次郎など、皆さん、素晴らしいです。

あと一言。深層心理学的に人格を分けて書く場合があるのですが、人格を分離して書かれた双子に一般的な人間の心理を研究する人たちがいます。ユングや河合隼雄などです。双子もの、あるいは双子が出てくる神話を使って人間全体の心のありようや心の姿を研究する人たちも、特にユング派の心理学者に多いようです。